| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 黒 澤　毅 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（英語学） |
| 学 位 記 番 号 | 甲第 102 号 |
| 学位授与年月日 | 2013 年 3 月 22 日 |
| 審 査 研 究 科 | 外国語学研究科 |
| 論　文　題　目 | Shifting Values and Representations of Tradition and Urbanity in Port Moresby: An Observation of Postcolonial Era in Papua New Guinea |
| 論文審査委員会 | （主査）大東文化大学教授　阿出川 祐子 |
| | （副査）大東文化大学教授　望月　昭彦 |
| | （副査）大東文化大学教授　山﨑　俊次 |
| | （副査）立 教 大 学 教 授　豊田 由貴夫 |

## 黒澤　毅　博士論文　審査報告

黒澤毅氏は平成 6 年 3 月大東文化大学外国語学部英語学科を卒業し、在学中の平成 5 年 11 月より 4 ヶ月間、また平成 7 年 11 月より 4 ヶ月間、ニュージーランド国立ビクトリア大学 E.L.I. (英語研修研究所 )に留学した。平成 15 年 4 月に大東文化大学大学院外国語学研究科英語学専攻修士課程に入学し、平成 16 年 3 月と 7 月にパプアニューギニア国立大学において、スティーヴン・ウィンドゥ教授の下でトクピジン（Tok Pisin）に関する指導を受け、またトクピジンにおける英語の借用語に関する調査研究を行った。平成 17 年 3 月修士課程を修了し、平成 17 年 4 月博士課程後期課程に入学し、博士論文の執筆を目標に研究を継続し、このたび博士学位申請論文を提出することとなった。

博士学位申請論文 Shifting Values and Representations of Tradition and Urbanity in Port Moresby: An Observation of Postcolonial Era in Papua New Guinea (以下、本論文と略称)に関わる研究論文として以下の論文があり、これらの研究業績を基盤として本論文を執筆し「外国語学研究科博士課程後期課程英語学専攻の学位に関する細則」(平成 23 年 5 月 16 日改正・施行)に則り、平成 24 年 9 月 30 日に大学院事務室に提出した。その後、博士論文指導委員会は、大学院事務室での 2 週間にわたる事前開示において特に異議のコメントがないことを踏まえ資格審査を行い、10 月 31 日の本論文提出を認めた。

これまでの論文は、10 篇あり、そのうちの 1 篇は米国地理言語学会 (American Society of Geolinguistics)の学会誌に掲載されたものである。また口頭発表における 3 篇のうち 1 篇は全国規模の学会である英米文化学会全国大会で発表したものである。

論文

1. 2003. “Differences between the Aesthetics of European Culture and Japanese Culture concerning Logos and Pathos”. 『外国語学会誌』、 *33*、 65-77、 大東文化大学外国語学会。
2. 2004. “Reduplication in Papua New Guinea Pidgin Language (Tok Pisin)”. 『外国語学会誌』、 *34*、 105-121、 大東文化大学外国語学会。
3. 2005. “Comparing between Translations of English Songs into Japanese in Culture of Logos and Pathos”. 『外国語学研究』、 *6*、 100-108、 大東文化大学大学院外国語学研究科。
4. 2005. “A Study of Word-formation in Tok Pisin”. 『外国語学会誌』、 *35*、 157-175、 大東文化大学外国語学会。
5. 2006. “The Cultural Role of Metaphor Use in Tok Pisin”. 『外国語学研究』、 *7*、 49-63、 大東文化大学大学院外国語学研究科。
6. 2007. “The Symbolic Value of Pig and Pork in PNG”. 『外国語学研究』、 *8*、 103-119、 大東文化大学大学院外国語学研究科。
7. 2008. “A Study of Ethnic Identity ‘Gaze’ in Port Moresby”. 『外国語学会誌』、 *38*、 343-360、 大東文化大学外国語学会。
8. 2008. “Useful expressions in the EFL classroom”. 『日本大学歯学部紀要』、 *36*、 55-63、 日本大学歯学部。
9. 2009. “The use of current English loanwords in the Tok Pisin newspaper Wantok”. *Journal of the American Society of Geolinguistics*, *35*, 39-46, The American Society of Geolinguistics.
10. 2010.「呪術から見たメディア分析の一考察：ワントク新聞に見られる広告記事の事例研究」。 『外国語学研究』、 *11*、 121-135、 大東文化大学大学院外国語学研究科。

学会口頭発表

1. 2008. “The use of Recent English Loanwords in the Tok Pisin Newspaper Wantok”. An International Conference on Geolinguistics in the 21st Century, The American Society of Geolinguistics (September 27, at Baruch College of The City University of New York).
2. 2010.「パプアニューギニアにおける英語から借用した身体語彙の意味の拡張性」、英米文化学会　第 133 回例会 (2010 年 11 月 12 日於日本大学歯学部)
3. 2012.「英語の印刷広告に表象された『パプアニューギニアらしさ』」、英米文化学会　第 30 回大会 (2012 年 9 月 8 日於山梨県立大学)

1.　論文の要旨及び特色

本論文は、パプアニューギニア(以下 PNG と表す)文化に内在する現象のなかで、中心的都市ポートモレスビーの人々が地方の伝統的な価値観をどのように再構築し、都

市型現代社会に合致させて生活しているかといった社会変容を、従来の文化人類学や社会学的な見地からではなく、言語文化学的見地から、言語使用、メディア、生活習慣等の問題に焦点をあてて述べた論文である。

価値観の変容を論述する際に、価値観の定義と先行研究の理論的枠組みを捉え、多くの研究を参考にしている（Firth 1961, Parsons 1965, Rochon1998, Hofstede 1984, Hall 1996, De Vos 1982, Poole 1999, Gregory 1980, Geertz1973）。

価値観の変容は、英語と地方で使われているピジン英語とは異なる都市型のピジン英語の出現で捉えることが可能であり、また近代社会における「商品」と伝統社会における「ギフト」との物質交換作用の変化として捉えることも可能である。それは、民話と文化的生産物でも検証でき、そこに表出する文化項目の動物、紙幣等にもその価値観の変容を概観できる。これは、近代的西洋文化の影響も加味して、英語表現による広告が既存社会のものより価値があるという印象を与えることも意味している。

本論文は次の 3 つの事象についての研究課題を設定することにより、当初の研究目的を達成しようとするものである。

(1)PNG を代表する民話や新聞に見られる言語使用は、伝統的な価値観をどのように含み、３つの言語(英語、トクピジン、ヒリモツ）選択や教育上の言語使用は、都市生活者にとってどのような価値観の要素となっているか？

(2) 現代のメディアに見られるイメージ形成にはどのような価値観が表されているか？

(3) 都市生活者にとって身近な、土地占有やビンロウジ使用等に関する生活習慣の問題は、”Wantok System”の崩壊を意味しているのか？

本論文の構成は以下の通りである。

List of Tables
Maps

Chapter 1: Introduction
1.1 Notions of this study
1.1.1 Objective of this study
1.1.2 Hypothesis of this study
1.2 Outline of this paper
1.3 General backgrounds of PNG
1.3.1 Language policy
1.3.1.1 A role of three official languages
1.3.1.2 A gaze of language status

1.3.2 Cultural diversity and nation-state
1.3.2.1 Social and cultural networks' outlook
1.3.2.2 A Melanesian way between national and regional *kastam*
1.3.2.3 Educational development through new educational curriculum
1.4 Geographic and historical backgrounds in Port Moresby
1.4.1 Circumstances of Port Moresby
1.4.1.1 An urban area as National Capital District and cultural encounters
1.4.1.2 Domicile and dwelling
1.4.2 A regional network and solidarity in urban life
1.4.2.1 *Wantok* system conceptualised by PNG people
1.4.2.2 A role of churches
1.5 Outline of method
1.5.1 A PNG study in cultural linguistics
1.5.2 Tradition and modernity: views on this study

Chapter 2: Literature review
2.1 Distinction of social and cultural values
2.1.1 Societal and cultural values
2.1.2 Classified values in social and cultural perspectives
2.1.3 Dilemma of social and cultural values
2.2 Social and cultural identity
2.2.1 Definition of identity in cultural and social groups
2.2.2 Definition of identity in regional and national discourse
2.2.3 Social and cultural identity
2.3 Values related to identity in urban areas
2.3.1 The gap between regional and urban areas
2.3.2 Ethos and world views
2.3.3 System of values and identity in PNG
2.3.4 Cultural totemism in urban discourse
2.3.5 Representations of cultural and social values in Port Moresby

Chapter 3: Methodology
3.1 Design of the analyses performed in this study
3.1.1 Structures of expression through space cognition in PNG
3.1.2 Recognition of horizontal and vertical aspects in expressive structure
3.1.3 Discourse related to non-human objects

3.2 Materials
3.2.1 Folktales
3.2.2 Discourses found in cultural resources
3.2.3 Media
3.3 Figurative expressions that reflect values based on PNG identity
3.3.1 Figurative expressions that illustrate values based on PNG identity
3.3.2 Expressions influenced by values and identity in PNG
3.3.3 Values and identity in metaphoric and metonymic communities
3.3.4 Relevance of semiotic expressions analysis
3.3.5 The analysis of values based on socio-cultural events

Chapter 4: PNG materials reflected in social and cultural discourses
4.1 Representations found in ancestor (*tumbuna*) stories
4.1.1 Animals describeed in *One Thousand One Papua New Guinean Nights*
4.1.1.1 Pigs
4.1.1.2 Crocodiles
4.1.1.3 Birds of paradise
4.1.1.4 Shells
4.1.1.5 Dogs
4.1.2 Tools described in *One Thousand One Papua New Guinean Nights*
4.1.2.1 Drums
4.1.2.2 Axes
4.2 Cultural resources as the State
4.2.1 National flag
4.2.2 State currency
4.2.3 *Haus Palamen* (Parliament House)
4.3 Representations that appear in social and cultural discourses
4.3.1 Elements of social and cultural discourses that appear in differing regions
4.3.2 Representations of the traditional materials that appear in advertisements

Chapter 5: Discussion
5.1 Preservation and effacement in urban daily life that appeared in media
5.1.1 Expressions of modernity and traditionality that appeared in advertisements
5.1.2 Representations of national identity that appeared in advertisements
5.1.3 Recognition of existing values in urban society that appeared in newspapers
5.1.4 Dilemmas caused by values that differ between urban and rural communities

5.2 Formation of new values based on identity in urban communities
5.2.1 Formation of the New Melanesian Way in PNG as reflected by urban dwellers
5.2.2 Shifting from the Melanesian Way to the New Melanesian Way
5.2.3 The New Melanesian Way observed from the viewpoints of *self* and *other*
5.2.4 The possibilities of emerging trans-tribalism in urban society

Chapter 6: Conclusion
6.1 Results of this study
6.2 Implications of this study on future PNG research
6.2.1 Limitation of this study
6.2.2 Future PNG study

Notes
References
Data Sources
Appendix A
Appendix B
Appendix C
Appendix D
Appendix E
Appendix F
Appendix G

第 1 章では、本論文の研究目的に加え、PNG とポートモレスビーに関する必要最低限の文化的、歴史的背景を扱っている。特に、ポートモレスビーにおける近代の英語の使用や、これに影響された、従来のものとは異なるピジン英語の出現、あるいは土地問題を含む生活習慣の特徴などについて考察している。

第 2 章では、PNG 社会の価値観の変容に関連した先行研究を紹介している。価値及び価値観に関して Firth (1961)の定義を取り上げ、さらに Parsons (1965)及び Rochon (1998)の定義の重要性を論じている。また個人や集団レベルにおける価値観の相違について、Hofstede(1984)の考えを検証している。価値観と密接に関係するアイデンティティの定義については、Hall (1996)や De Vos (1982)、Poole (1999)等の先行研究を取り上げ、吟味している。本研究における価値観の分析には、Firth が示す 6 区分の内容と Rochon の 3 つの要素を組み合わせた、黒澤氏独自の新たなフォームを生み出している。また Gregory(1980)の伝統的社会における「ギフト」と近代社会における「商品」の交換作用を取り上げ、後の章におけ

る具体的事象の分析の前段階を確認している。また、Geertz (1973)のエートスと世界観の区別についても取り上げ、「文化的言説」と「社会的言説」の理論を有効なものにする可能性を探求している。

第 3 章は、本論で使用した方法論を述べており、2 章で示した先行研究に基づき、価値及び、価値観を言語文化学の視点から議論し、Gell(1998)が示したネクサス論について検証している。このネクサス論は、主体行為と客体行為の中に 4 つの主要素を認め、これらを明示された部分と暗示された部分に分け、その本質を読み取ろうとするものである。これに関連して、Leach (1976)の本質的表象性から非本質的表象性へと移行する際の集団間、もしくは個人間の視点の置き換えについても取り上げ、論じている。

第 4 章では、2 章で検討した 6 区分の価値観の視点と 3 章で検証した「主体行為と客体行為」及び「明示された部分と暗示された部分」の概念を踏まえ、民話と文化的生産物に対する言説を考察している。民話から抽出したそれぞれの文化的項目は、PNG の紙幣に印刷された動物や道具および、それに関連した文化的生産物としての国旗と紙幣、国会議事堂などである。これらの民話から見られる表象性の範囲は、人間界と自然界(精霊界)との繋がりを示す描写から人間界での日常行為を示す描写に及んでいる。これらの内容は、Appendices に資料として表され、これらを分析する事で、よりその特徴が明確にされている。

第 5 章は、近代の視点から PNG の 2 大新聞の記事や投稿された手紙、そして広告で語られる言説を分析対象としている。これら対象物は、年代によって価値が急速に変化する事を示し、その製品や業種によって、伝統的性質を示す言説からの変化が見られる。1980 年代の、PNG 国内に居住する富裕層を対象とした英語によるものや、PNG の人々を対象とした 90 年代の特徴、あるいは 2000 年代の、国家に帰属する構成員としての様相の強く表れたものなどが例として挙げられる。特に言語の視点では、ピジン語による表象の役割が変化し、更なる英語の重要性が顕著になっている。そしてこのような現象に関して、地方と結びついた文化的言説を中心としたものから国家に結びついた文化的言説への置き換えが行われたと分析している。

第 6 章は、本研究の結論の章であるが、結論に先立ち、各章の要約を確認し、それを通して、全体の概観を再確認している。本研究の結論としては、ポートモレスビーにおける人々が、地方と結びついた伝統的価値観に新たな要素を組み込むことで、彼らの新しい価値観を再構成し、その価値観が都市部の生活スタイルへ浸透しているという考え方を提示している。一方、このような状況は、村に見られる文化集団としての属性が都市部における社会集団としての属性に容易に適合されない側面が同時に存在することを示し、この複雑性がポートモレスビーにおける近代的な価値観の特徴を顕著に示しているとし、これまでは、PNG の人々が西洋文化の性質を受容してきたように見られたが、むしろ西洋文化の性質を既存の PNG の性質に組み込むことで新たな PNG の kastam を示している、言い換えれば、Melanesian way が New Melanesian way に変容する、という結論を導いている。

２．論文の審査内容及び評価

博士学位論文審査委員会は、10 月 31 日の本論文提出後、外国語学研究科委員会の議に基づき発足した。委員は、応用英語学分野の望月昭彦教授、言語学分野の山﨑俊次教授、学外からはパプアニューギニア研究の第一人者である豊田由貴夫教授(立教大学大学院教授)を副査に迎え、応用英語学分野の指導教授として阿出川が主査をつとめた。

口述試験は平成 25 年 2 月 1 日、大東文化会館を会場として公開審査で実施された。始めに本人のプレゼンテーションがあり、続いて各審査委員と会場出席者との質疑応答が行われ、引き続き、別室にて博士学位論文審査委員会の協議が行われた。各審査委員のコメントを以下にまとめる。

PNG の文化と言語に関する研究は、これまで文化人類学及び社会学の分野で精力的に行われてきたが、言語文化学の視点に立って行われた PNG 研究は、特に日本においては、数少ないものであり、方法論も十分に確立されているとは言い難い。しかし、英語圏の国についての文化と言語の関係性を探るという視点からの、言語文化学の PNG 研究は重要な使命を担っており、本論文は多くの難問を含むテーマにあえて挑戦した意欲的、かつ先駆的なものである。特に建国後数十年という PNG 社会の中でも、中心的都市であるポートモレスビーに焦点を当て、その急激な発展状況の中で見られる社会現象のうち、やや複雑とも言える歴史背景を持つ言語使用の問題、生活習慣やメディア等の事象を取り上げ、そこに表された人々の価値観とその変容を論じるという着目点は、高く評価される。

第 1 章は本論文の序論と位置づけられ、本研究上の重要な背景知識と問題点が提示されているが、PNG とポートモレスビーに関する数多くの文献にあたり、これらを本論文によく生かしている点が評価されよう。

第 2 章は、本研究に関する先行研究を扱っている。PNG 社会の価値観の変容に関する Firth、Parsons、Rochon による文献と、価値観に深く関係するアイデンティティの定義に関する、Hall、 Devos 、Poole の先行研究の選択は適切であり、更に文化システムの問題に関して Hofstede の概念まで範囲を広げて探求した意欲を評価する。本章全般に関しても、多くの先行研究にあたってよく調べ、抽象的な概念をよく理解し、論文のなかに取り入れている点が複数の委員から評価された。特に Parsons の「文化的価値および社会的価値」の理論と、Rochon の「価値と社会の変化」の理論を結びつけ、後の章において変形援用させる基礎を会得した点は、完成度が 100 パーセントとは言い難いにしても、黒澤氏の独自性が認められ、高く評価される。

第 3 章は本論文の方法論に関して、言語文化学の先行研究を取り上げ、特に Gell のネクサス論を詳しく論じ、これを具体的な事象に援用する基礎を理論的に構築した点が先駆的であると認められる。

第 4 章は、2 章で扱った先行研究を実際の文化事象に当てはめて分析している点が特徴である。特に Rochon の 3 要素と Firth の 6 つのカテゴリーの枠組みを援用して実際に PNG の民話に当てはめて分析したものは、民話を価値変容の資料に使用した点が斬新であるこ

とと、分類が AppendixA から AppendixG までの 145 頁にわたる表に著され、労作であり、資料としての価値が高いという点で複数の委員から好評を得た。

第 5 章は、PNG の 2 大新聞の記事や広告に見られる製品を、トクピジン（Tok Pisin）や英語の使用状況を通じて検討し、都市部の人々の生活に見られる価値観を検討している。豊富な資料を収集し、これを駆使して、既存の”Melanesian Way” を温存しつつ新たな生活スタイルを生み出す人々の価値観を変容の理論と結び付けている点は注目に値する。

第 6 章は結論の章であり、本論文で最初に設定された研究目的に沿って研究課題が検討され一定の有効な結論が得られたと認められる。

次に今後の研究発展に寄与すると思われる審査委員のコメントをまとめる。論文の目的の明示性に関して、仮説は段落の先頭に記した方がよい。結論の章に書かれた各章の要約は全て取りやめそれらを各章の要約に持っていくべきであり、バランスの点から改善が必要であろう。1.4.1.2 など、図示などによる工夫がなされるべきであった。表現の明解性について、特に英語表現について改善が望まれる。民話の扱いについて、言語別・民族別の扱いをもう少し緻密に扱うべきではないか？

以上、改善点が指摘され、これらの表記上の修正はその大部分が既に済んでいる。他方、内容面については、本論文の基盤をなす論文が国際学会の学術雑誌に掲載され、また全国規模学会での、全国大会における口頭発表においても、高い評価を得ている。また最初に設定した研究目的は十分に達成されている点に鑑み、本論文は課程博士の学位請求論文として十分な水準に達しているものと判断できる。

３．結論

以上の審査内容及び論文評価に基づき、本論文を審査対象とする博士学位論文審査委員会は全員一致をもって、本論文は博士(英語学)の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する次第である。